

次の文章を読んで、解答用紙の問いに答えなさい。

木材の再使用は寺社だけではなく、民家でもふつうにおこなわれていました。古くなった家を解体する場合、再利用できるものは新しくつくる家の部材として使ったのです。

これは家に限らず舟でも同じです。使わなくなった舟は解体し、板に戻して使える部分は大切に保存しておきました。

現在は人間の手間賃が一番高くなっています。そのため解体し、使える部材を残すよりは一気に壊してしまつて、工場から送られてくる規格品の新しい材料を使うほうが、結果的には安くすみます。不思議なことですが、持っている材料を使うよりも新しく材料を買ったほうが安いのです。流通や経済、効率というものが原価に影響しているからです。

こういう背景もあつて、現代の技術と古代の日本人の技術者たちの間には、考え方に大きな違いがあります。最後まで使おうという知恵は、建物や舟をつくるときにはもちろん、木を伐り出すときから運ぶときにまではたらきます。効率優先の考えでは、どの方法が速いか、どっちのほうが安いかが基準になります。大事に使いきることを優先して訓練・修業してきた人たちは、ちよつと時間や手間がかかっても、これだけのことはしておこうということになりますから、やることも、手順も、心構えも違つてくるのです。

現代の技術の根本にはまず「効率」という考えがあります。同じものをつくるなら、できるだけ手間のかからない方法を工夫します。それはそのまま利益につながるからです。古代にも効率という考え方はありましたが、それは目的ではありませんでした。木の建物でいえば、目的は木をいかに生かし、いかにして丈夫な建物をつくるかにありました。効率のことばかり考えていると、「最低ここまでではしなくてはならない」という基準が設定され、それがいつのまにか目標に変わつてしまいがちです。ややもすると、「最低の基準を満たしさえすればいい」「規則を守りさえすればいい」「いわれたことをやりさえすればいい」という貧しい考えになつてしまいます。

もし法隆寺がそうした効率優先の考えを基に建てられていたなら、千三百年もの間建ち続けていたかどうかは疑問です。木をいかに生かすか、そのことに心血を注いだ結果が千三百年たつてなお健在ということに表れているのです。